研究最前線

THE FRONT LINE OF RESEARCH

文学部

常陸の古墳文化研究最前線

PROFILE

佐々木 憲一
SASAKI Ken'ichi

文学部教授
専門：国家形成期の考古学

1962年　東京生まれ、京都育ち
1986年　ミシガン大学卒業
1995年　ハーヴァード大学人類学研究科博士課程修了（Ph.D.）
1999年　明治大学文学部専任講師
2009年から現職

主な著書・論文
「北アメリカにおける先史時代社会の諸相」『岩波講座世界歴史』14（岩波書店・2022年）
『茨城県石岡市佐自塚古墳の研究』（共編著・明治大学文学部考古学研究室・2021年）
『続常陸の古墳群』（共編著・明治大学文学部考古学研究室・六一書房・2020年）
『霞ヶ浦の前方後円墳』（編著・明治大学文学部考古学研究室・六一書房・2018年）

所属学会
日本考古学協会、駿台史学会、考古学研究会、日本考古学会、Society for American Archaeology

都道府県別で前方後円墳が一番多い県というと、奈良県やユネスコ世界遺産百舌鳥・古市古墳群が所在する大阪府を思い浮かべる方が多いのではないだろうか。しかし、実際には奈良県に約二七〇基、大阪府に約二二〇基知られているのに対して、全国最多は千葉県の六〇〇基以上、そして第二位が四五〇基以上知られる茨城県なのである。旧国単位で比べても、茨城県南西部も含めた下総が約四六〇基、常陸が四〇〇基以上知られており、やはり全国第二位は変わらない。下総の前方後円墳は、学術的に「前方後円形小墳」と区別される全長二〇～三〇メートル程度の小規模なものが多数を占めるのに対し、常陸では全長六〇～八〇メートルの本格的な前方後円墳が多数を占めるから、常陸の古墳文化は「全国一」と極言することも不可能ではない。

しかし現実には、常陸の古墳研究は非常に遅れている。一口に前方後円墳といっても、前方部と後円部の接続部（クビレ部と呼ぶ）が幅広かったり、狭かったり、前方部が非常に長かったり、短かったりする。発掘調査以前に個々の前方後円墳の年代の違いや地域的特徴に迫るには、古墳の測量は必須であるが、茨城県では未測量の古墳が圧倒的に多い。というのは、茨城県では古墳の大多数が個人の所有で、地権者が高齢化して古墳の維持が難しくなり、古墳に雑木が密生しており、測量不可能な古墳が圧倒的に多いからである。伐採と雑木の処分には、学内研究費ではほとんど賄えないような予算が必要である。つまり、多額の学外研究費を獲得して雑木をまず伐採しないと、測量ができないのである。

二〇〇一年以来、私はそのような困難に挑戦し続けてきた。アメリカ合衆国で高等教育を受けた京都人の私がなぜ常陸をフィールドにしているかというと、明治大学文学部考古学研究室が一九五〇年の設立以来、常陸をフィールドの一つとしており、非常に幸運にも、そのフィールドを引き継いだからである。この二〇年間に科学研究費や文部科学省大型研究を活用して、常陸南部霞ケ浦北西岸地域に所在する前方後円墳、大型円墳を一七基測量、その内六基を発掘調査してきた。また前任の大塚初重名誉教授が一九八三年二月に発掘調査した石岡市佐自塚古墳の発掘調査報告書をまとめる機会にも恵まれた。

そのおかげで、数多くの興味深い事実を明らかにすることができた。まず、前方後円墳の築造が全国的には六世紀に減少する中で、小美玉市南部旧玉里村域に六世紀第2四半期に七基の前方後円墳の築造が集中すること、六世紀第1四半期～第2四半期に全国的に受容される横穴式石室（墳丘斜面から「羨道」と呼ばれるトンネルを通って、遺骸が埋葬された「玄室」と呼ばれる部屋に至る構造の埋葬施設）の常陸南部への導入が六世紀第3四半期まで遅れること、六世紀第3四半期には前方後円墳の築造が全国的に終焉を迎える中で、この地域では周濠を伴う本格的な前方後円墳の築造が七世紀前半まで続くこと、などである。

これらの事実から、刺激的な仮説を導き出すことが可能である。それは、中央のヤマト王権がさほど強力ではなく、逆に常陸の在地豪族たちの自立性、主体性が古墳時代（三世紀半ば～七世紀前半）を通じて強く残り、中央の王権の常陸地域への影響は大きくはなかったということである。確かに前方後円墳が築造されるから、中央の王権からの情報は得ており、直接間接に中央と交流があったことは確かであろう。しかし、常陸南部における前方後円墳築造のパターンが中央とここまで異なるので、中央の王権の意図に在地の豪族が十分従っていなかった、あるいは在地の豪族の主体性を発揮できる余地が残されていた、と考えざるを得ないのである。

図1　霞ケ浦北西岸地域の古墳の分布

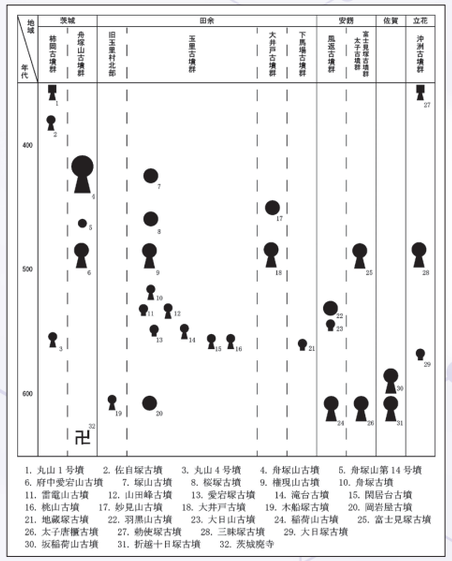

図2　霞ケ浦北西岸地域における小地域別の古墳築造の新旧関係（編年）
これらの中で、筆者が調査したのは2～8、11～14、16、21、29～31である。特に5、7、16、29～31は発掘調査を行った。